

月の花挽歌 ～4.私鉄沿線～

4-2

昌幸が二十三歳で早稲田大学経済学部を卒業する1976年に西島三重子が歌ってヒットした『池上線』のリフレインする最後のサビ部分（池上線が走る町に、あなたは二度と来ないのね、池上線に揺られながら、今日も帰る私なの）のフレーズだった。

昌幸にしてもロッキード事件一色であった時代と重なる位の記憶程度しかなかった流行り歌が、EP盤に針を落としたように再生されることが不可解だった。

出口が一つしかない池上駅を降りて数分歩いた所の公園の傍に、東京チェスクラブの入ったコーポラスがあった。

昌幸がチェスクラブへ着いたのは午後二時過ぎだった。八組が対局できるようにセットされたフロアでは三組が指していた。

学生時代の好敵手で、今はクラブの経営者の山川が、「一時間遅れ……、携帯しようかと思っていたところだ」とむっとした顔で言って、そそくさと一番奥の席へ案内すると、白と黒のポーン(歩兵)を右手と左手に握り隠し、昌幸に手番を選択させた。

「山川さんのソワソワが、こっちにも伝染して、おちおち指してられませんでしたよ」

馴染みの一人が後手番の席に腰かけた昌幸に、含み笑いをしながら言いつけた。

四時間かけて一局を、ドロー(引き分け)で終わると、感想戦も待たないで、「チョット付き合えよ」と山川は昌幸を酒に誘った。

「戸締り、よろしく」と山川は常連に気安く言い置いてから、昌幸の返事も待たないでカーディガンを引っ掛けた。

池上駅裏の小料理屋のカウンターで、昌幸と山川は、焼き鳥を食べながら、日本酒を酌み交わしていた。

近況を伝え合っている最中。「何かあったのか？」と山川は酌をしながら、やおら切り出した。

「うん、何？」「水臭いぞ」

「……、近ごろ池上線に乗ると、西島三重子の歌のフレーズがリフレインしてね」

「リフレイン？」

「なぜか繰り返し口ずさんでいる」

山川はカーディガンのボタンを外して「女将さん、おでん見繕ってちょうだい。それとお銚子二本追加」と頼んでから、「堀内、これか？」と小指を立てた。

「分かるか？」

「定跡、定跡！しかもチェックメイト寸前だな」と言ってほくそ笑むと、美味そうに大根を口に頬張った。